

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520523

研究課題名（和文） コミュニケーションのための日本語教育文法の体系的記述

研究課題名（英文） Systematic Description of Japanese Communicative Grammar

研究代表者

小野 正樹（ONO MASAKI）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10302340

研究成果の概要（和文）：

日本語教育に役に立つような記述方法を用いて、日本語学習者にとって難しい学習項目を取り上げ、対照言語の観点からも分析を行った。2009年度には配慮表現として、日本語に強く見られる現象をポライトネスの観点から分析し、研究成果として『コミュニケーションと配慮表現-日本語語用論入門-』を出版した。2010年度からは、副詞、文末表現、とりたて詞と日本語の主観的な表現を、中国語、韓国語、カザフ語、ロシア語にも調査を広げて、配慮表現の可能性を探った。研究成果は、日本語コミュニケーション研究会を毎年開催し、2010年度開催分については、『日本語コミュニケーション研究 I』として、報告書を刊行し、WEB上でも公開している。また、上級学習者のデータを多数収集した。

研究成果の概要（英文）：

Using description methods to be employed in Japanese language teaching, we focused on items of the Japanese language which are difficult to master for Japanese language learners and analyzed them from the view point of contrastive linguistics. In 2009, we analyzed consideration expressions and went as far as publishing a book “Communication and Consideration Expressions: Introduction to Japanese Pragmatics”. From the year 2010, we extended the coverage of the surveys and started a research on Chinese, Korean, Kazakh, and Russian languages. Our research results, based on extensive data collected from advanced learners of Japanese, are discussed at annual conferences on Japanese communication, in a new journal titled “Japanese Communication Research”, launched in 2010, and on our research website.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：対照言語・ポライトネス・配慮表現・主観性・引用

1. 研究開始当初の背景

海外の日本語教育は初級を中心に整備されており、今後の課題は日本国内と海外の大学の教育連携強化と考える。多様化している日本語学習者に対し、どのような日本語教育が必要なのか。留学生 30 万人計画も控え、短期留学生や研究を希望する院生レベルが今後増えることが予想され、国内外の教育の連続性の必要性が増して行くであろう。そこで、文法教育に焦点を絞り、大学生活で必要な場面や状況に対応する日本語文法項目の記述を目指した。記述に当たっては、機能的な文法記述と母語別に学習者を支援できる文法記述を目標とし、そのために日本語教育研究メンバーだけではなく、日本語研究、対照言語研究の視点を積極的に取り入れて、目標を共有し、各言語の理解を深めることで、その地域からの留学生にスムーズな学習方法を提供する。

日本語教育文法については、松岡弘(2000)『日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク)で、教えるべき文法項目が整理されており、野田尚史(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』(くろしお出版)でも、デザイン設計が提案されている。課題として、(i)文法項目の整理、(ii)文法項目の提出順序、(iii)各言語の知識、そして、(iv)技能別の文法が挙げられているが、まだデザイン的であり、体系的なものは見られない。

2. 研究の目的

2 部門からアプローチを考え、第 1 部門では日本語教育文法の選定および体系化、第 2 部門では、母語別に見た学習者の問題点の項目化を目指した。日本語学習の習得の観点から難しいとされる(小野・牧原 2008)、1) とりたて詞、2) 複文構造、3) 文末表現、4) 否定、5) スコープ、6) テンス・アスペクトの果たすコミュニケーション上の機能を考える。

■ 第 1 部門：文法項目の選定および体系化

外国語能力では、統語的に正確な文・誤りのない文を生成する能力に関心が行くことが非常に多い。しかしながら、通常の会話において、話し手と聞き手の間で深刻なコミュニケーションのトラブルにつながる誤用は、統語的に誤りを含む文ではなく、統語的には正しい文が語用論的に問題のある発話をされた場合であることが多い。実際のコミュニケーション能力を伸ばそうと考えた場合、統語的に正確な文を生成する文法能力だけではなく、場面・機能に応じた適切な文を生成できる能力が必要となる。日本語の約束表現を例にすると、「図書館で待ちます」という表現をとらず、「図書館で待っています」の

ようなテイル形式の表現が用いられる。こうした発話機能と、文タイプや文型の関連性を調査するため、a) 必要な発話機能項目の選定、b) 発話機能と言語形式のマッピングを課題として考えた。

■ 第 2 部門：母語別学習者の問題点の項目化

地域性や言語を重視した日本語教育研究のためには、母語能力を活かした教育文法が必要で、そのための対照言語研究を行う。資料収集や実験調査をスムーズにし、言語判断の強化など信頼関係に基づいた体制作りを含む。形式と機能の関係上、外国語として日本語で表現する場合には、母語の影響・干渉があるため、母語話者ごとの文法が望ましく、日本語の構造と近いとされる膠着語で SVO 構造の韓国語話者、孤立語で SVO 構造の中国語話者、そして、屈折語の SVO 構造のヨーロッパ言語話者の日本語の特徴を分析する。特定の母語話者が発想しやすい日本語の特徴の調査、たとえば、何を主語とするか、自動詞/他動詞、能動文/受動文、文末表現形式の選択があげられる。例として、文法習得の観点から見ると、人称主語の明示されるヨーロッパ言語と、日本語では、「する」系の発想と、「なる」系の発想に異なりがある。自他動詞の区別が形式的に見えにくい母語話者と、自他区別がある母語話者では、日本語の自他動詞の習得についても、難易度の違いが予想され、同じ文法項目がコミュニケーション上果たす領域についても、調査対象とする。

3. 研究の方法

第 1 部門では、日本語教育文法の項目選定および体系化にあたり、「上級学習者の課題とする文法項目-意見の伝え方教育を考える」(小野 2008)、「日本語学習に対する中国人学習者の言語学習観調査 - 中央民族大学の場合 -」(関崎 2008)をもとに、小野と関崎が学習レベルを鑑みて、必要な「日本語教育文法リスト」の選定を試みる。また、小野と牧原は、文法項目の中でも、主観表現について、文機能との関わりを図る。発展させる基盤としては、「主観表現の伝え方-NS と NNS の意見文に見られる文末表現の分析から」(小野・牧原他 2008)、「新しい文法 「かなと思う」について」(小野 2006)、「状況提示型の策動的モダリティ」(牧原 2004)を発展させる。いずれも、文末表現に焦点を当てたもので、主観性に関わる文末表現は、機能文法の重要な領域と考え、特に複文構造、とりたて詞、否定のスコープと文末表現の関係を分析した。

4. 研究成果

H21年度は「モダリティ」と「とりたて」を研究項目として取り組み、その成果は9月の北京大学・清華大学・筑波大学3大学合同セミナーで、日本語学の視点からの「とりたて詞「くらい」の意味とモダリティ」(沼田)、言語学の視点からの「モダリティ+コピュラ」構文の統語構造(竹沢)として発表を行い、さらに、2月にも行った同セミナーで沼田は「とりたて詞「も」の作用域と否定」として、課題となっている現象のリスト化を行い、なすべき課題を明確にした。また、牧原と小野が中心となり、発話行為理論に基づき、「禁止」「許可」「改善要求」「勧誘」「主張」「賞賛」「伝聞報告」に関わる日本語の表現方法を『コミュニケーションと配慮表現-日本語語用論入門-』13章にまとめた。また、母語別に見た研究としては、中国語母語話者に限ってみると、沼田の指摘したとりたて詞の習得が難しく、また、“外の関係”とされる連体修飾と合わせて、学習者には課題になっている。加えて、命令形の用法を見ると英語母語話者が親しい関係での命令形使用を行うのに対し、中国語母語話者が上位・下位者の関係でのみ、命令形を意識していることなど、母語別記述の方向性が見えて来た。

H22年度は3方向で研究を進めた。1点目は主観性を中心に研究を行った。研究成果として、11月中国人民大学・北京大学・筑波大学日本語学フォーラムで成果を発表した。特に、韓国語(小野正樹)との対照研究を視野に入れた文末表現や、モダリティな名詞について扱った。主観性という概念が、言語研究だけではなく、文学研究との接点が発見でき、かつ、日本語以外の言語との比較の方法を議論した。文学との関わりにおいては、「ただ」という言語形式が、従来の副詞的用法といった言語分析のみならず、一作家の分析にも可能なことを示した(青木三郎)。2点目として、従来意味論で扱われてきた、主観性をコミュニケーション上での研究対象とした場合についての課題を指摘し(沼田善子)、2011年2月に、第1回日本語コミュニケーション研究会を主催し、モダリティ研究の再考(牧原功)、引用研究の捉え直し(小野正樹)を行った。2011年3月には、コミュニケーションの課題となっている配慮表現の考え方を発表し、習得研究にも応用可能なことを示した。文法形式のみならず、談話構造の分析にも有効かを検証した。文法的な現象については、基本的な考え方は、2010年5月刊行の『日本語教育研究への招待』に、「コミュニケーションのための文法一語用論の観点から、日本語教育文法を見直す」(小野正樹)としてまとめた。3点目は、語彙分野の検討で、本年度は、上級学習者の作例会話データベースを作成し、特に文末表現、とりたて詞、副詞についての日本語学習者によ

る作例のデータ収集を行った。

H23年度は、予定通り国内外での研究成果発表に努めた。海外の台湾政治大学、北京大学、タリン大学、高麗大学でのフォーラムや、天津外国語大学の国際日本語教育集会、国内の研究会で発表、および、研究成果報告書の作成と、WEB上での公開を行った。5月に台湾政治大学で開催された「2011年 若手研究者の合同研究フォーラム ー東アジアにおける日本研究と日本語教育ー」において、沼田善子が「とりたて詞の作用域と焦点」、小野正樹が「日本語引用表現に関する一考察」、8月には小野正樹・牧原功が中心となって、「日本語・中国語・韓国語・ロシア語・カザフ語の引用表現と日本語学習者の習得研究」の共同発表を行い、11月に行った「2011年北京大學・中国人民大學・筑波大學學術フォーラム」(於 北京大学)では、小野正樹が「コロケーションから見た引用」、沼田善子が「など」の作用域と否定」をそれぞれ発表した。また、2012年1月22日には、筑波大学にて「第2回日本語コミュニケーション研究会」を開催し、13本の研究発表成果を発表した。昨年度行った、「第1回日本語コミュニケーション研究会」の成果は12本の論文を『日本語コミュニケーション論集 第1号』として発行し、またWEB上
<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~ono.masaki.ga/HP/>と、
<<http://www.succ.soka.ac.jp/~myamaoka/J-communication1.htm>>でも公開している。

外国語との対照に当たっては、李奇楠北京大学准教授、金玉任誠信女子大学教授、シオリナ・ダリヤグルカザフ国立大学講師にも積極的に参画してもらい、共同発表や専門的氏式の供与を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計20件)

① 小野正樹・李奇楠・キム オギム・シオリナ・ダリヤグル・牧原功(2011)「引用表現の日本語・中国語・韓国語・ロシア語・カザフ語の対照と日本語学習者の習得研究」、『日本語コミュニケーション研究論文集 I』, 査読無, pp. 39-48, 日本語コミュニケーション研究会

② 小野正樹 (2011)「日本語引用表現の分類試案」、『日本語コミュニケーション研究論文集 I』, 査読無, pp. 3-10, 日本語コミュニケーション研究会

③ 牧原功(2011)「非断定の文末形式とポライトネス」、『日本語コミュニケーション研究論文集 I』, 査読無, pp. 51-60, 日本語コミュニケーション研究会

④小野正樹(2010)「コミュニケーションのための文法—語用論の観点から、日本語教育文法を見直す—」、『日本語教育学への招待』、査読有、pp. 83-98、くろしお出版

⑤小野正樹(2010)「現代日本語の命令形について—日本語学習者の習得と意識—」、『国際日本研究 2号』、査読有、pp. 79-98、筑波大学人文社会科学部国際日本研究専攻

⑥竹沢幸一・王丹丹(2010)「日中英語におけるモーダル要素の統語的分析—繰り上げとコントロールを中心に—」、『第8回北京大学・人民大学・筑波大学合同フォーラム予稿集』、査読無、pp. 10-11、北京大学外国語学院

⑦青木三郎(2010)「〈ただ〉の風景」、『文藝言語研究. 言語篇』、査読有、pp. 1-15、筑波大学人文社会科学部国文学・言語専攻

⑧小野正樹(2009)「「かもしれない」の談話機能について」、『漢日理論言語学研究』、査読有、pp. 26-30、北京大学

〔学会発表〕(計 10 件)

①小野正樹・李奇楠・キム オギム・ショリナ・ダリヤグル・牧原 功「日本語・中国語・韓国語・ロシア語・カザフ語の引用表現と日本語学習者の習得研究」2011年世界日本語教育大会、2011年8月20日、中国天津外国語大学

②沼田善子「高度な国際コミュニケーション能力開発のための言語研究」、2010年中国人民大学・北京大学・筑波大学日本語文学フォーラム、2010年11月6日、中国人民大学

③山岡政紀/牧原功/小野正樹/李奇楠/金玉任「日本語の配慮表現研究と日本語教育」2010年世界日本語教育大会、2010年7月31日、台湾国立政治大学

〔図書〕(計 4 件)

①山岡政紀/牧原功/小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』、明治書院、256 ページ

②砂川有里子/加納千恵子/一二三朋子/小野正樹 編著(2010)『日本語教育研究への招待』くろしお出版、306 ページ

③小野正樹(2009)『日本語教育の過去・現在・未来』第5巻文法「上級学習者の課題とする文法項目—意見の伝え方を例として—」、凡人社、212 ページ

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~ono.masaki.ga/HP/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 正樹 (ONO MASAKI)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10302340

(2) 研究分担者

青木 三郎 (AOKI SABURO)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：50184031

沼田 善子 (NUMATA YOSHIKO)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：70189356

竹沢 幸一 (TAKEZAWA KOICHI)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40206887

牧原 功 (MAKIHARA TSUTOMU)

群馬大学・国際教育・研究センター
・准教授

研究者番号：20332526

関崎 博紀 (SEKIZAKI HIRONORI)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：30512825